

べっふの文化財 №.13

——動物特集号——



(ジョウカイボン)

別府市教育委員会
別府市文化財調査員会

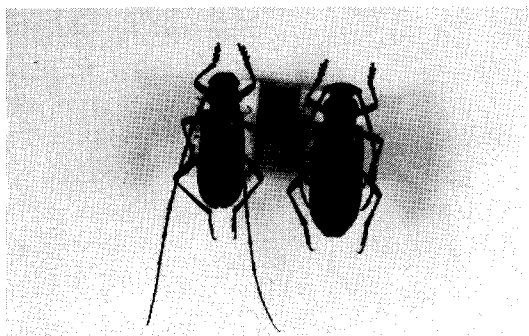
別府市の珍しい甲虫

佐々木 茂 美

●はじめに

別府市における昆虫の採集地としては、鶴見山とその周辺地域、由布岳から猪ノ瀬戸地域、内成、枝郷地域、高崎山に連なる赤松、銭瓶峠地域、とそれに上人ヶ浜付近一帯の海岸線地域、と大別できるであろう。近年、市内各地において自然を見なおそうとする人々によって昆虫の調査も少しずつではあるが進められ、その結果、特に鶴見山、猪ノ瀬戸地区には、九重山群に見られる高地性の種の棲息が確認され、今後の調査の進展によってはかなりの珍稀種がまだこの別府市内に棲息している可能性が出て来た。このことは、とりも直さず、別府市が観光地として発展してきたおかげで、工場等の開発の手が余り伸びておらず、比較的自然の保存状態が良いことに起因するものである。そこで近年発見された甲虫のうち比較的珍しく、分布上興味深い8種をあげ、簡単に解説しておきたい。

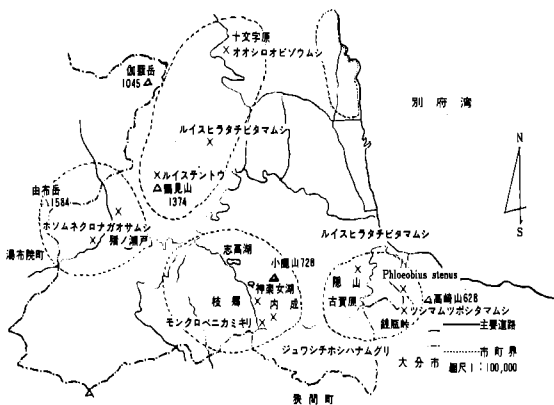
市枝郷から内成地区にかけてのクヌギ林に豊産することが確認されたものである。しかし、発生期も短かく（10日前後）、局地的な発生のため、いぜんと珍種には違いない。



モンクロベニカミキリ (*Purpuricenus lituratus*)
の♂(左)と♀(右) 1980, 5, 枝郷産

2 ツシマムツボシタマムシ (サムライムツボシタマムシ)

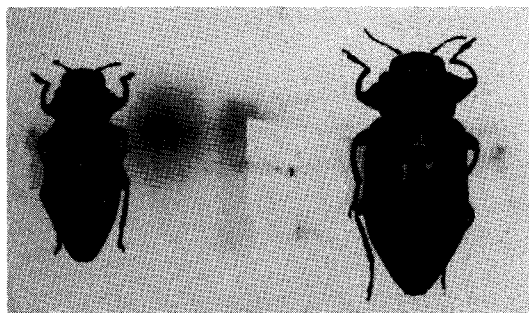
本種の班紋については、いろいろな説があり、対馬から記載された6紋型と前年に記載された4紋型のサムライムツボシタマムシがその後同一種であるとして、学名は後者のものが一般に使われている。本種は、中国大陆から対馬に分布する種として最初記載されたため、班紋の変異をみると、大陸から対馬では6紋型が多く、以後発見された、中国（岡山、広島）、九州（飯田高原）では4紋型が多いようである。別府市では1980年に入り、内成、枝郷地区のクヌギの伐採木にムツボシタマムシ（写真）とともに見られ、特に6月前後には多産する。班紋の変化も、4紋型と6紋型が10対1くらいの割合で現われ、九州では飯田高原（1975）以来の発見となった。



別府市近郊の昆虫採集地概念図

1 モンクロベニカミキリ

本種はベニカミキリ族の大型美麗種で、赤い翅鞘に黒い烏帽子状の班紋が特徴的で、誰でも見間違うことはないカミキリである。別府市は、県下でも本種の多産地として知られており、5月上、中旬頃、冬期伐採されたクヌギの株からはえた“二次枝”の茎や若葉をかじっているのを見ることができる。10年位以前には佐伯市など県南での記録が多かったが、近年全く採集記録を聞かなくなった珍種で、1980年、別府市枝郷でクヌギの林中を飛び回る本種を発見したことから調査が始められ、別府



ツシマムツボシタマムシ (*Chrysobothris samuraj*)
とムツボシタマムシ

3 クロナガオサムシ (キュウシュウクロナガオサムシとホソムネクロナガオサムシ)

クロナガオサムシの仲間のうち、県下に棲息が確認されているのは上記の2種であるが、分布的に、キュウシュウ——が低山地帯、ホソムネ——が高冷地帯と大まかに分けることができる。しかし、市内猪ノ瀬戸においては、両種が混棲している。高冷地である由布岳に隣接しているためであろうが、このような例は他に類を見ない。キュウシュウ——は杉林に多いことが知られ、内成、枝郷地区では冬期、杉林付近のカゲで越冬中のものがよく発見される。ホソムネ——は、九重山では朽木中で発見されるが、猪ノ瀬戸では気温が高いためか、キュウシュウ——と同様にカゲで越冬するものが多く、比較的砂が多い土質を好むようである。



キュウシュウクロナガオサムシ (*Carabus Kyushu-ensis* Nakane) ♀ 左とホソムネクロナガオサムシ (*Carabus Miyakei* Nakane) ♂ 右

4 ルイステントウ

本種は従来、佐々治寛之博士により、本州 (中部山岳)、シベリア、ヨーロッパに分布記録されているが、九州における記録はなかった。しかし、近年、長崎県より雲仙岳、福岡県より英彦山と報告が為され、1978年になって、本県から2例が報告された稀種である。本県での2例のうち1例は鶴見山頂での記録で、おそらく、鶴見山麓に棲息しているものが上昇気流によって吹き上げられたものと思われる。本種の食性はわかっておらず、発見時の状況から、吹き上げられた後、山頂のツツジに一時休止していたものと思われ、本種の多頭採集は現時点では無理である。しかし、九州での採集地をみると、雲仙岳、英彦山、鶴見山、と高冷地で、いずれも山頂での採集であることから、三山の植物相を比較してみると、案外食性の手がかりをつかむことができるかも知れない。又、県内の2例ともロニナ型 (*Ronina form*) で、原型の赤色地の翅鞘に黒色の班紋を持つものはまだ採れていない。いずれにしても、市街地から数10分の地にこのようなテントウムシが発見されたことは分布的興味をひくばかりか、本種の棲息分布が九州一円に及ぶことを示唆しているように思う。

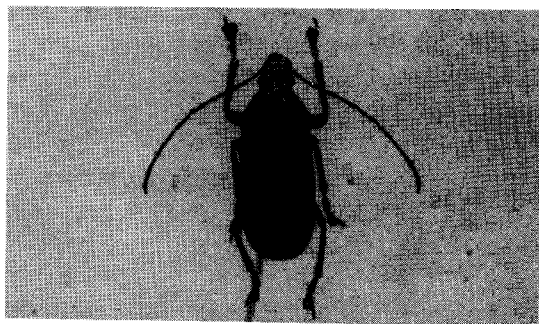


鶴見山頂で採集されたルイステントウ
Adalia conglomerata (Linnaeus)

5 *Phloeobius stenus* Jordan

ヒゲナガゾウムシの一種で、1979年8月26日、高崎山麓に続く赤松地区の畑脇にあるメダケの林中から得られた稀種である。本種はネムノキを食害するセマルヒゲナガゾウムシの極近縁種で、採集のきっかけは、同竹林中のメダケのほとんどが枯れかかっており、昆虫の脱出口が空いていたことから、メダケの一部を割り、羽化直後と思われる本種1頭を発見したものである。その後、同地区一帯のメダケを調べたのだが、再発見できなかった。あるいは、定地点での繁殖はせず、毎年移動しているものかも知れない。

大分県初記録 (1 ♂ のみ)

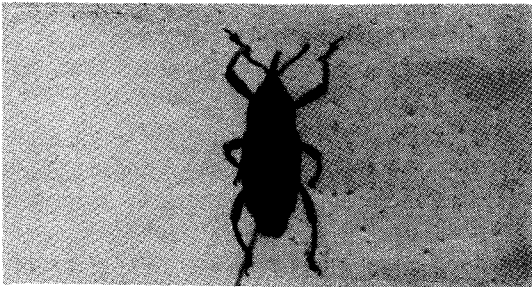


メダケを食害するヒゲナガゾウムシの1種
(*Phloeobius Stenus* Jordan)

6 オオシロオビゾウムシ

本種は、1875年、Roelofs によって日本から初めて報ぜられたオサゾウムシ科の1種で、ゾウムシ類の中ではかなりの大型で、体長13mm前後に及ぶ。体全体が灰褐色の粉状体で密におおわれ、上翅には写真のように鮮かな白条が認められるので、地味ではあるが、極めて印象的な種である。本種の野外での採集例は極めて少なく、本県では、日田郡(1935)、玖珠町(佐々木 1977)、竹田市(宇山 1978)の3例がある。その記録が少ないのは、その生態が知られていない為で、玖珠町の例はクヌギの樹液に頭部を突込み樹液をなめていたものである。その他、1963

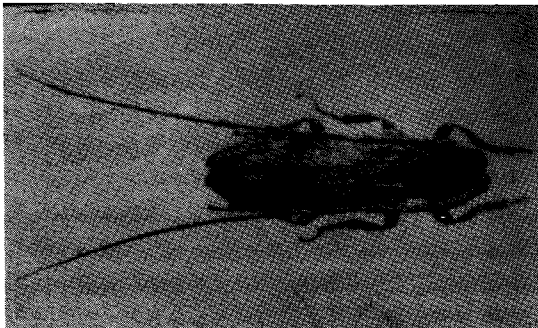
年、五島列島でのワラビの被害例がある。そのため、本種を採集する目的で山野を歩いてもなかなか出会えずにいた訳だが、本年、別府市十文字原で数10頭の採集が記録され今後の採集に新しい一頁が示されたものである。つまり、十文字原での例は以前から報ぜられていた、クヌギの樹液、ワラビの被害、の両者を合わせた例で 7月中旬ごろ、オサムシを採集しようと、ジュース（砂糖、ビール、などを混ぜ合わせたもの）を用いたトラップをしかけたところ、オサムシと一緒に本種数10頭が一度に採れた、というもので、ワラビの多い環境に樹液に近いジュースを置いたことから採集できた訳である。ともかく、県下における唯一の多産地として残しておきたい草原である。



十文字原で採れたオオシロオビゾウムシ
(*Cryptoderma fortune* Waterhouse)

7 タテジマカミキリ

本種は特に珍しい種ではないが、生態的に興味深い種で、成虫で越冬する数少ないカミキリムシの1つである。食樹はカクレミノで、夏から秋にかけてカクレミノの茎から木クズが出ているのを見かけることがある。これがタテジマカミキリの食害樹の特徴で、ベニカミキリ族のものと良く似ていて、加害された枝は根元まで食い荒らされ、秋になって羽化脱出する。別府市内では、内成、枝郷、赤松地区と、カクレミノの自生する所ではたいがい発見でき、晩秋から春までの寒い間、カクレミノの細枝に逆さに、触角をまっすぐ前につき出し、へばりついたらまた越冬する変ったカミキリムシである。



枝郷のカクレミノから羽化したタテジマカミキリ
(*Aulacnotus pachypezoides* Thomson)

8 ルイスヒラタチビタマムシ

体長2.5~3.5mmの小さい種で、上翅は美しい青藍色に光り、部分的に唐金色を帯びる。非常にきれいな種で、採集家に珍重されている。分布は本州、四国、九州と主に西南日本に多い種であるが、九州東岸部での記録は稀れである。ノイバラの潜葉虫で、5~6月頃、ノイバラをピーティングすると採れる。



Habroloma lewisii E. Saunders
ルイスヒラタチビタマムシ

●おわりに

以上8種の甲虫を別府市の珍しい種としてピックアップしたが、先にも述べたように、別府市は非常に恵まれた自然環境をもち、特に、鶴見山麓部から枝郷地区にかける林野、由布山麓とそれに続く猪ノ瀬戸湿原などは県下においても有数の昆虫の宝庫であり、他地域とは趣きを異にした昆虫達の生活が見られることから、特に保存しておきたい地域である。ともあれ、自然保護が叫ばれる昨今、地域開発の名のもとで行われる山野の削堀は、人々の知らないうちに小さな昆虫達の生活を破壊しているのである。昆虫達をはじめ自然に生きる生物を絶滅させることなく、将来に残そうとすることは、自然を理解し、愛する私達の使命ではなからうか。そのためにも春夏秋冬、自然の中に身を投じ、日夜変化する自然の変化を肌で感じながら、その任に当たっていると私は自負している。おかげで今回、このような愚筆で別府市に棲息する甲虫の一部なりとも紹介することができた。機会を与えて頂いた関係者の方々に感謝するとともに、読んで下さる方が少しでも自然を見直し、愛して頂けるようになれば幸いに思う。

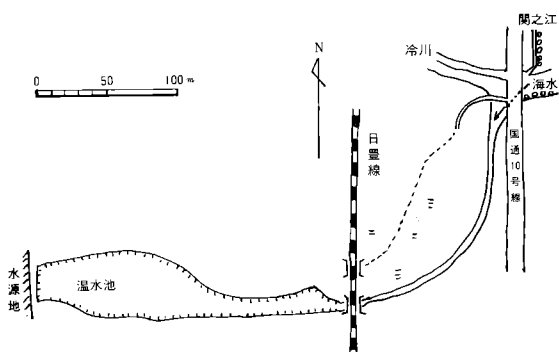
(1981年12月)

温水池のカワアナゴ

平松 恒彦



一温水地一水面はホテイアオイで埋めつくされている



温水地の概念図

温水地は、かつての関之江川（地元での呼び名）支流が昭和25年頃の水源地拡張工事で断ち切られ、残った下流部分が周辺の低湿地をとりこんで現在のような池の形をとったものである。この池の水源は、上手に隣接した温

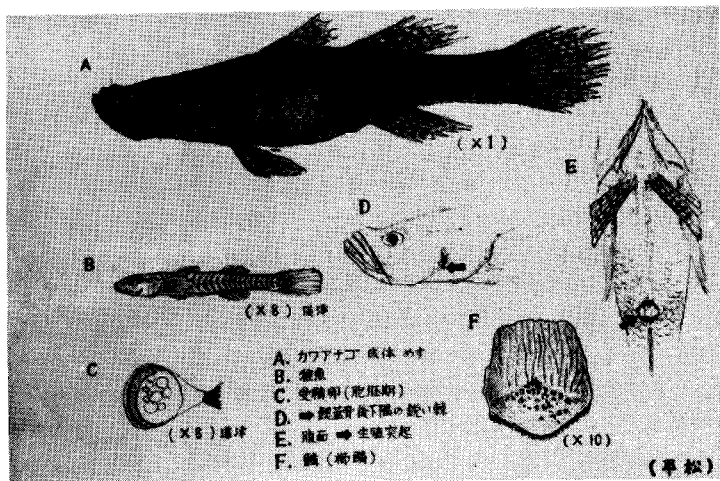
水水源地やその周辺から湧出した地下水（18～20℃）と、更に上手に古くからある温泉水（30℃前後）が主になっている。そのため冬期でも深みは20℃を下らない高い水温を保っている。その上、大潮前後の満潮時には池の下方から関之江海岸に通じる小川より海水が逆流し、底層には塩分が多く、いわゆる汽水湖としての特徴を備えている。

こうした特色をもつ池にはハゼ科のカワアナゴ及びオカメハゼのような珍しい魚類が

生息し、その外にもヨシノボリ・チチブ・ウナギ・ギンブナ・コイなどの淡水魚類が確認されている。カワアナゴは、日本では松島湾・能登半島以西の本州・四国の太平洋側、九州・沖縄に生息し、更に台湾・中国にまで及んでいる。川の中流域の下部から汽水域にかけて生息し泥底を好む、美味である。（宮地伝三郎ほか：原色淡水魚図鑑・保育社）とされている。

地元の人たちは古くからこの珍しい魚をアブラメと呼んで食用にしていた。戦後この池の一部を所有していた亀川中央町居住の小畑国夫氏はこの魚があちこちに棲息していない魚であることを知り、池一帯を所有者たちから買いとり、この魚を保護しようと捕獲を禁じた。その後専門研究者の調査の手がつけられ、カワアナゴ及びオカメハゼの棲息が確認された。

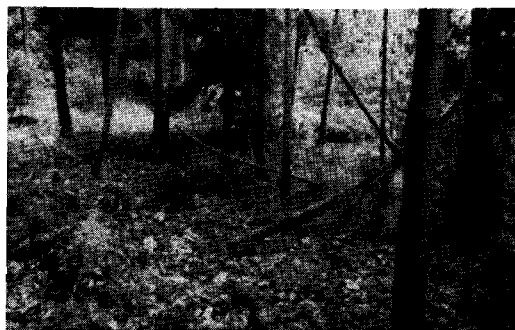
温水池産のカワアナゴは、他の産地のものとくらべて体長が際立って大きいことが特徴である。魚類学雑誌第14巻第4号（1967年12月31日発行）に皇太子殿下「日本産ハゼ科魚類カワアナゴ属4種について」によると、亀川産の体長12.6～21.6cm、他地域のものでは千葉県利根川産のものが最大で18.7cm、その他のものは6.2～14.5cmの間であるように記録されている。おそらくは、冬でも20℃前後の高水温が保たれるという特異な環境が大きく影響しているものと考えられる。最近では、水源地の改造工事などで地下水の流入量が減ったため、海水とのバランスの変化が生じ稚魚の死ぬこともある。個体数は以前より減ってきた、と根気よく保護を続けている小畑さんという。公の手で何とか環境の保持をはかりたいものである。



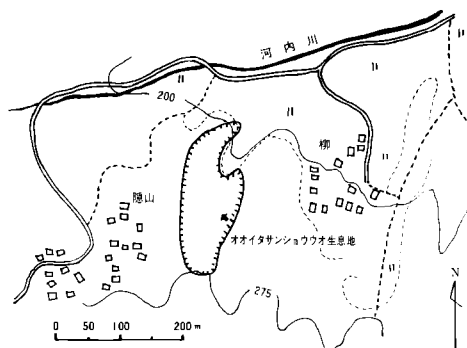
カワアナゴ（温水池産）

柳のオオイタサンショウウオ生息地

平 松 恒 彦



柳のオオイタサンショウウオ産卵場



柳地区概念図

生息地は、河内川上流海拔 200～280 m の丘陵地にきざまれた谷あいである。このあたりは、基盤がやわらかい由布川軽石流におおわれているので固結度が低く侵食されやすい。そのため谷の上部が欠落して崖となり、それが両尾根と連なって谷をかこんだ袋状の地形となっている。谷には杉の植林がなされているが良好な生育状況ではなく、タケなどのはいりこんだ混こう林である。林内には年中涸れない湧水があり、沼状の水たまりや、それらをつなぐ細流、更に谷の開けた部分の休耕田側溝などの止水中にオオイタサンショウウオが産卵繁殖している。この産卵場をふくむ柳地区では以前からサンショウウオの生息が知られていたが、昭和52年2月(1977年)当該生息地で卵のう11双とそれらの周辺にいたオス6匹を確認した。その後毎年2月上旬より3月上旬にかけて産卵数を調べてきた結果によると、昨年(1980年)までは6～9双と大きい変化はなかったが本年(1981年)は2双と激減している。前年夏の出水時のものと思われる土砂流で谷の形が変化したことと、そのために生じた水たまりの移動などのかく乱が原因と思われる。

オオイタサンショウウオについては「大分の生物」(大分生物談話会編1981)に次のように記されている。佐伯

市城山の雌池に住んでいるサンショウウオは、日本各地に住んでいる小形のサンショウウオとは、形・色・習性などがちがうことから、1931年(昭和6年)田子勝弥先生によってオオイタサンショウウオと命名され世に紹介された。(中略)オオイタサンショウウオの分布はその後の調査で海岸部の丘陵地域だけでなく、南は番匠川を北は駅館川を境としてその間に生息していることが明らかになった。このようにオオイタサンショウウオが大分県下を主な産地としていることの理由の解明はむずかしい。また、産卵期が年間で最も寒い時期にあたっていることなど未解決の問題が山積している。これらの究明には、他のサンショウウオ類のくわしい分布調査とともに地史・気候・生息地の植生や幼生の湿度条件に対する適応度などあわせて追求しなければならないだろう。これらは大変な仕事であるが大分県特有のサンショウウオであるからには、ぜひ未解決部分の究明とその保護に努めたいのである。(佐藤真一)

このように、オオイタサンショウウオは大分県に限って生息しているといってもよいような分布域をもつこと、それにサンショウウオの類は系統が古くほとんどアジア大陸の東部のみに産し、種類ごとに特定の生態をもち、それぞれの分布域を固執することのいちじるしい生物なので、日本の生物地理を論じ、ひいては日本列島の地史を考察する上で学術上極めて貴重な動物である。

当市では、この外隠山・鳥越・内成地区、神楽女の水沢地・鶴見岳南面の谷の一部など、市街地に最も近い柳地区から別府市西南部の山地、更に鶴見岳の1000 m 地点の高地まで生息していることが確認されている。今後分布域の精査とともに、生息地の環境保持に何らかの対策をはからなければならないのが研究者たちの願いである。



オオイタサンショウウオの卵のう



オオイタサンショウウオの成体

上人ヶ浜海岸の動物

平松恒彦 佐藤村夫



潮のひいた上人ヶ浜海岸

別府湾の奥底にある別府市の海岸は、市の発展にともない、築港や埋立が行われ、港湾施設やテトラポットの護岸工事などで自然的景観を有する海岸を失い、関之江海岸の砂丘と干潟、そしてここ上人ヶ浜海岸一帯の磯や砂丘だけがわずかに自然の面影をとどめている。別府の海岸線で人工によって改変されていない純自然海岸は、海岸線の総延長の約9%となっていたが（大分県：大分県の自然 昭49）更に埋立地が拡張されこの海岸は稀有の存在となってきた。

(1) 磯の底生動物

上人ヶ浜の磯の南部には、えびす川の川口にできた砂浜があり、ここから北に進むにしたがって砂礫から転石が加わり、上人ヶ浜に至るあたりでは岩石の多い磯の形状をなしている。干潮時には、およそ50mぐらいの幅であらわれる潮間帯にも海面に頭をあらわすほどの岩はなく、いわゆる転石礫地帯をなしている。海岸線は距離にして300m程度で小規模であるが、このような磯と潮間帯には小さな潮だまりもでき、多くの海岸動物の生活を見ることができる。昭和53年春から秋にかけてこの海岸の干潮時に調査を行い、浅海の底生動物の類32種を採集した。公園よりの排水流入域にはタマキビガイが多く、流出した砂泥底でツノテッポウエビ1頭が得られた。潮干帯上部には、ウミニナ・フジツボ・カメノテなど、下部ではケハダヒザラガイ・ムラサキイガイなどが多く見られた。また、砂礫を掘るとイソゴカイも採集できる。

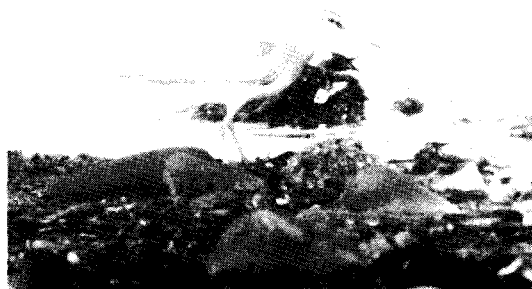
(2) 海岸の野鳥

この海岸の沖では、時としてカンムリカイツブリ・ウミアイサが見られ、岩礁では貝類などをあさるミヤコドリやクロサギなどが観察される。潮間帯には磯の野鳥が多くコチドリ・イソシジギ・キアシシギなどシギ・チドリ類が生息している。また、秋から春にかけてユリカモメ

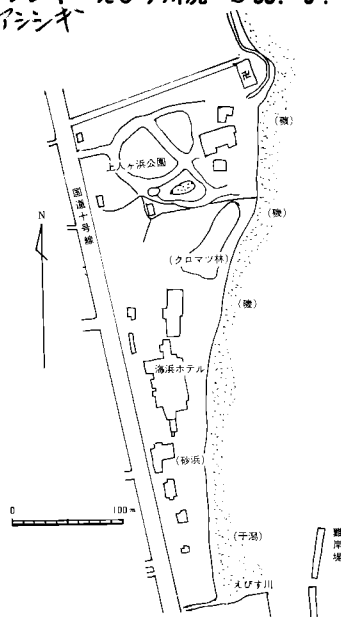
・セグロカモメ・ウミネコなどのカモメ類の大群が乱れ飛んでいる。えびす川の流れこむ川口の泥干潟ではキセキレイ・セグロセキレイ類が多く、シギ・チドリ類もよく集る。

海浜の松林一帯ではカワラヒワ・スズメなどが繁殖しシジュウカラ・メジロなどとともに害虫をあさって松林の保護にも役立っている。

こうした上人ヶ浜公園をふくむ海岸一帯は、一方では市民の手近かなレクリエーションの場となっている。図1の写真は11月末の日曜日に撮影したものであるが、潮の引いたあとの水たまりで小魚をすくって遊んでいる母子や、ゴカイを掘って釣りにでも行くらしい父子連れなどの姿が見られる。このように、海岸の自然に接近し、海岸の自然を学習する場としても唯一格好の環境である。



イソシギ えびす川尻 S 55. 9. 14.
イソシギ



上人ヶ浜海岸の概念図

ブッポウソウと珍しい鳥類

ブッポウソウ

姿のブッポウソウ

初夏の夜に深山の神社・仏閣などで「ブッポー、ソウ」と鳴く鳥のいることは、古くから知られていたが、夜鳴くので誰もその声の主を見た人はなかった。その季節に緑色の体で、くちばしと足が赤い鳥が姿を現すために、それをブッポウソウと名づけられていた。博学の弘法大師さえも「仏法僧の三宝を鳴く霊鳥」だとしていた。

ところが昭和10年6月12日、山梨県の野鳥研究家の中村幸雄さんが苦心の末、月明りをたよりに声の主を射落したが、それはコノハズクという一番小さいミミズクであった。ちょうど同じ頃、鳳来寺山からその鳴き声がラジオ中継された。その声を聞いた人が自分の飼っているコノハズクが同じ声で鳴くことを学界に報告した。昼間の鳥で全く夜は活動しないブッポウソウと、夜行性のコノハズクとが長いこと全く混同されていた。それから、「姿のブッポウソウ」と言われるようになった。

識別のポイント

ハトより小さめで全身が青緑色の鳥で、円い大きな頭とよく目立つオレンジ赤色のくちばしと足がある。翼は長目で飛ぶと翼に、空が透けて見えるような銀白色の大きな円いはん紋が見えることが特徴で、緑・赤・青・黒と多彩な羽色が映える南方系の華麗な姿は、他種と見違えることはまずない。雌雄とも同じ羽色の鳥である。

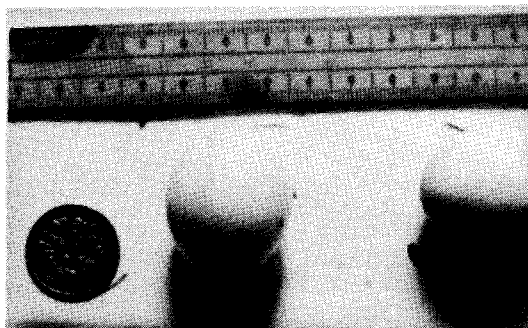


みなとやの屋上を飛ぶブッポウソウ S 51. 6. 10.

変った習性

主に繁茂した森林に生息し、飛行力も強くよく飛びまわる。食物は昆虫類で甲虫やセミ・バッタ・ガガンボを好んで食べる。付近を飛ぶ昆虫を舞い上っては横長い広い口で捕食し、もとの場所に戻る習性がある。朝や夕方に活動することが多いが、昆虫の活動する時間帯と関連が

佐藤 村 夫



ブッポウソウの卵 S 56. 7. 14. みなとや

あるのだろうか。この他に貝類やカニ類もたべる。不消化物はペリットとして口から吐き出す。そのため1日に何回か餌をとらず、じっと静止したまま動かない姿を見ることがある。鳴き声はゲッ・ゲッ・ゲ・ゲ・ゲ・ゲと、よく通る独特のだみ声で鳴きながら飛んでいる。

繁殖の方法

5月初旬に夏鳥として渡来し、5月下旬から7月にかけて、スギ・ヒノキ・モミなどの巨木の樹洞に営巣する。穴を穿つこともある。キツツキの古巣・建物のすき間・ダムの排水孔や大型の巣箱・電柱も利用する。新しい電柱にカギになった口ばしで、少しずつむしり取り縦長い穴をあける。卵は純白ではん紋がなく光沢のあるやや大きい卵で3～5個産み、卵を抱く日数は22～23日で雌が抱き、ひなは両方で育て25日位で巣立つようである。

生息分布と繁殖地

世界で17種あるブッポウソウ科のうち、この一種のみがアジア東部に生息し、ウスリー地方からマレー半島・スマトラ・インド・オーストラリアと広く分布している。その北方型の亜種が我が国に渡来するが、佐渡、北海道などは少なく、本州中部以西・九州・四国で繁殖し、兵庫・鳥取・広島県下ではよく観察されている。九州地方の繁殖と生息状況については、昭和53年の全国一斉鳥類繁殖地調査を主に、収集しえた資料で整理すると表1の通りである。観察地では繁殖もしていると思われるが、確認された場所は区別した。この表からみると、大分県は有数な繁殖県になっている。渡来地は営巣などの関係から、森林や巨木のある神社・仏閣などに限られ、局地的で毎年同じ場所で観察されているがその数も少ない。

みなとや旅館のブッポウソウ

〈営業環境〉鉄輪旅館街のどまん中にある4階の箱を昭和48年から毎年巣箱にして繁殖している。地上13m60cmの位置にある浴室の蒸気抜きは直径10cm。長さ20cmのヒューム管で、壁を通して埋めこまれている。その排気筒にスズメが営巣するので、浴室内に縦横ともに30.5cm、高さ27cmの箱を取りつけた。箱には引戸があって内部が観察できる。樹洞が巣箱である。

県名	繁殖確認地	観察地
大分	大分市春日神社 竹田市近郊 別府市下釜ダム	日田市大原八幡、大分市墓地公園、玖珠町角埋 耶馬溪、直川村、九重地域、由布山麓、上人ヶ浜
福岡	英彦山	矢部村、小石原村、釈迦ヶ岳、背振山、御前岳
宮崎	高原町	西都市、西米良村、椎葉村、日の影町、南郷村
熊本	五木村	観察地は決っているが、年により渡来数がちがう
鹿児島	垂水市	志布志地方、佐多町、開聞神社、外ヶ所
佐賀	なし	渡来数が少く、まれにしか観察できない
長崎		

九州地方の生息分布と繁殖地 表1

〈昭和51年観察記録の概略〉

- 5月1日頃-----前年のように渡来した。(聞き込み)
- 5月16日-----縄が切って入れてあり、巢材はない。
- 5月22日-----排気孔を出入りする。産卵か、見ない。
- 5月28日-----警戒心が強く屋外写真撮影も困難。
- 6月7日-----産卵し抱卵中か。屋上の雄を撮影。
- 6月24日-----巣箱内で音がする。抱卵中であろう。
- 6月28日-----初めて内部を見る。赤裸のひなが6(孵化後3日目)羽保温中。6羽は不揃いである。
- 7月6日-----保温していない。餌は原形のまま与え、65分間に17回給餌した。ひなはギリ、ギリ、ギリ、ゲ、ゲ、ゲと大騒ぎして餌を受け70秒で静かになる。親鳥は警戒しながら巣穴に入る。
- 7月8日-----握りこぶし大に成長。大きく(2.5cm)(孵化後13日目)口をあける。黒褐色の糞は動物質で悪臭を放つ。ゼラチン膜はない。
- 7月11日-----大型のひなは背面が青緑色、小型は羽毛がではじめて灰緑色。43分間に6回給餌した。大型は巣穴の入口で餌を先取りしている。
- 7月16日-----巣箱の中を歩く音が聞える。巣穴から黒緑色の顔をのぞかせる。45分間に6回の給餌をした。
- 7月20日-----くちばしの先端が黒く、下くちばしの基部が黄色味をおびる。鼻孔は細長く、眼の周囲の赤褐色が巣孔の入口でよく見られる。
- 7月21日-----午後巣立ったようだ。(25日目)
- 7月23日-----3羽が上空を飛ぶ。ひなはいない。

- 8月2日-----巣箱を清掃し残物をとる。風切羽1枚を屋上で拾う。黒色だが外弁は青味をおび中央にコバルト色のはん紋がある。小型のひなが混って飛んでいる。

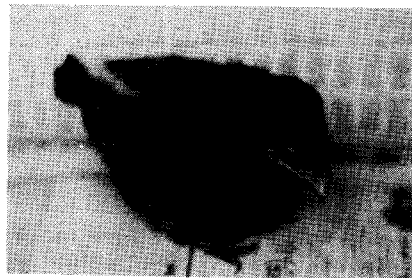
〈巣箱の残物調査〉 中島三夫氏に依頼する。

タマムシ(2)クロタマムシ(1)ヒゲコメツキ(1)ベッコウヒラタシデムシ(2)センチコガネ(1)スジコガネ(1)コフキコガネ(1)ナガチャコガネ(1)ドウガネブイブイ(2)カナブン(6)シラホシハナムグリ(3)ゴマダラカミキリ(3)ホシベニカミキリ(1)クロカミキリ(11)クマゼミ(1)ギリギリ(1)オオシオカラトンボ(1)と17種の昆虫が確認された。外部骨格が残りやすいもののみで他に2mm以下の小型が多数あった

が省略した。残物の昆虫には水稻・育苗圃・松枯れなどの害虫もあり、特殊なものに残飯や動物の死体に群がる虫もあった。貝殻や他の破片もあり、森林上空・地上・水辺と広範囲に採餌活動を行っていることが推察された。

年神社のブッポウソウ

昭和50年に社叢のクスノキの樹洞で繁殖しているのを竹尾良造氏が初めて確認した。毎年渡来し繁殖している

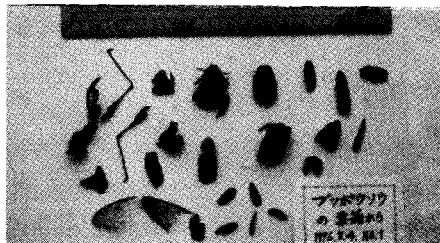


ブッポウソウのひな

S 51. 7. 11. みなとやが、昭和51年には3番で12羽が生息していた。その後1番が昭和56年まで渡来している。

保護対策

〈天然記念物に指定〉 繁殖地として長野県三岳村・岐阜県泉州原神社・山梨県身延町・宮崎県高原町狭野神社な



餌になった昆虫 S 51. 8. 4. みなとや

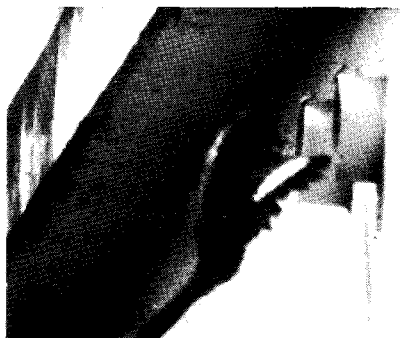
どが国指定を受けている。しかし高原町狭野神社境内では、狭野杉の巨木に営巣する30番が対象であるのに、現在では2-3番しか渡来しない状況である。九州地方では県指定の福岡県英彦山は繁殖しているが、古くから有名だった鹿児島県の霧島神社では繁殖していないようで各地とも好適の営巣地が環境破壊されたためであろう。

文化財に指定して保護することも一方法だが、有名になりすぎて写真撮影などの恐怖感を与える心配もある。



ブッポウソウの森 年神社 S 56. 5. 31

〈繁殖保護のために〉 繁殖しにくくなった原因に餌の他にムクドリとの巣争いがある。最近市街地や郊外でのムクドリの繁殖はめざましい。みなとやの巣箱では5月の渡来時には、ムクドリはすでに巣箱を先取りし、巣作りを終え、産卵抱卵中である。(昭和53~56年)。ムクドリとの争いには勝つこともあるが、ムクドリの卵を取除き断念させ他に移動させる援助を行ってきた。年神社の森でもムクドリが営巣し樹洞の確保が困難になり、更にクスノキの枝が枯れ落ちるなどの悪条件も重って今年は繁殖ができなかった。みなとやでは昭和56年にムクドリが巣材として持込んだビニール紐に、産卵し、抱卵中の雌が足を巻きつかれて脱出ができず死体となって発見される惨事があった。それでムクドリの巣作り以前に巣孔をふさぐ対策を考えている。何れにしても悪条件下の保護対策は重大課題である。



巣箱に入るブッポウソウ みなとや S 51. 7. 8.

ブッポウソウの名前

みなとやの江野尻家一同は、ゲエゲエちゃんの愛称で呼んでいる。学名では *Eurystomus* はギリシャ語で“口

の幅が広い”の意であり、*Orientalis* は“東洋”の意である。英名の *Dollar bird* は銀白色のコインに見たてよう、地方ではチョウセンガラス、モンツキガラス、紋付鳥とも呼んでいる。よくその形態や習性を表現していて面白い。

おわりに

ブッポウソウとの出会いは、上人ヶ浜婦人会館のアンテナにとまり、箆抜けした飼い鳥かな実に美しい、と思ったほど姿は朝日に映えて華麗であった。昭和47年5月22日朝7時すぎであった。強烈な印象はまだ忘れない。あれ以来長いお付き合いの鳥である。この度の記録整理に当り、日本野鳥の会宮崎支部長中島義人氏・福岡支部長土谷光憲氏・熊本県鳥獣保護センター所長今村京一郎氏をはじめ、県内では武石干雄会長・中島三夫氏・竹尾良造氏・特にみなとや旅館の主人江野尻博氏他ご家族の方々にご指導とご協力を頂いた。改めてお礼を申し上げたい。何れにせよブッポウソウは悪条件と戦いながら、日本に毎年姿を見せる。その数は減少しつつある。幻の鳥とならないように、ブッポウソウを守ろう。昭和57年こそは年神社とみなとやで、ひなをぜひ育ててほしい。

珍しい野鳥

はじめに

一年中別府市に留っている鳥(留鳥)は48種類で、春やってきて繁殖し、夏から秋に去る鳥(夏鳥)が36種、秋やってきて冬越し春に去る鳥(冬鳥)が45種、春と秋の渡りの途中で立寄る鳥(旅鳥)が18種で、合計 147種が現在別府市で確認されている。その中でごく稀で県内で別府だけで観察されたもの①②や県内でもごく稀で珍しいもの③~④について、観察記録(年月日・羽数性別・場所・観察者などの内容)と観察の手引を種ごとに簡単にのべたい。

① コムクドリ

- 昭和56年10月11日・1羽雄・羽室地区・川瀬泰治
- ムクドリより一周り小さく色も違う。雄は顔や頭が白く、ほおから胸にかけて茶褐色のはん紋があって、翼の白いはん紋がよく目立つ。飛ぶと腰が白っぽい。
- 本州中部以北の山地や北海道では平地で、樹洞を利用して繁殖し、冬は東南アジアで越冬する。渡りの途中に群から離れたのであろう。

② シラガホオジロ

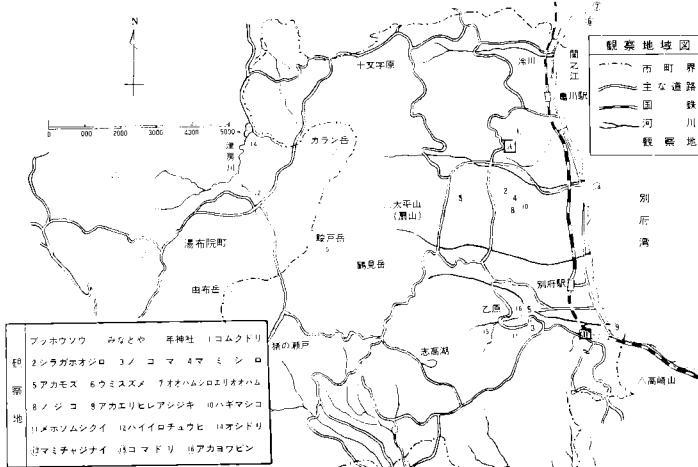
- 昭和55年9月2日・2羽雌・角殿山・佐藤村夫。

●ホオジロより大きい。北方の繁殖地から渡りの途中で立寄ったもので、ホオジロの雌は胸から腹が淡褐色であるのに対し、この雌はのどから胸に黒い縦すじがあるので区別ができた。地鳴きはチ・チの二声であった。

③ ノゴマ

●昭和55年11月4日・雄1羽・浄水場～乙原間・佐川金吾

●スズメ位の大きさで体の上面は赤味の少ない褐色で、まゆとあとに白線がある。雄ののどが鮮紅色でよく目立つのが特徴である。北海道を代表する鳥である。渡りの途中で見られたが、茂みの中にいて観察しにくいなどの赤さと、尾をピンと立てる動作が印象的であった。



④ マミジロ

●昭和53年5月12日・雄1羽・角殿山・佐藤村夫
●ヒヨドリより少し小さい。名前のように雄は全身黒くて、目の上のまゆ線だけがくっきりと白い。角殿山での雄もそれで見分けた。中部日本以北のよく繁った密林で繁殖し、地上の生活が多く虫などをたべる。早朝や夕暮れにチョボイ・チーとよく通る声でなく。越冬地は東南アジアである。この雄も繁殖に向う途中であったのであろう。

⑤ アカモズ

●昭和53年5月3日・扇山町・1羽・竹尾良造

昭和55年5月23日・朝見・1羽・佐川金吾

●モズと同じ位の大きさで暮し方も似ているが、違うところは名前のように頭頂から背にかけて赤褐色である。モズと同じように尾を振りながら鳴くが、振りおろす時にしばしば扇のように開く点も違う。県内では5月上旬渡来するが、モズよりも標高の高い山林内に生息しているので見かけることが少ない。

⑥ ウミスズメ

●昭和54年2月25日・関の江・1羽・立川孝之・佐川金吾。

●一見小型のペンギンのようであるが、ペンギンと違い飛ぶことができる。足に水かきがあって、翼をつかって上手に潜水し小魚などを捕食する。背は黒っぽく腹は白い。くちばしは黄色で、目の上に白いまゆ線もある。

●しかし海岸に接近することはまれで、飛行は遅く水面すれすれに飛び下手である。千島列島・ベーリング海沿岸で繁殖し、冬日本全域の海上に渡来するが、県内ではまれである。

⑦ オオハムまたはシロエリオオハム

●昭和55年2月11日・3羽・
昭和56年1月15日・3羽・
昭和56年3月22日・1羽・

立川孝之
関の江
佐川金吾

●体を深く沈めて海面を泳ぎ、水中に潜って小魚を捕えるので観察しにくい鳥であるが、特にくちばしを注意し

たい。くちばしはまっ直で反ってはいない(反っていればアビ)。冬期は頭・くび・体の上面がほとんど黒く見えて、下面は白色である。関の江の定置網近くで観察されるが、シロエリオオハムが少し小さいだけの違いで、両種はよく似ている。野外で大きさを判定することが大変困難なので、両種の名前をあげている。

⑧ ノジコ

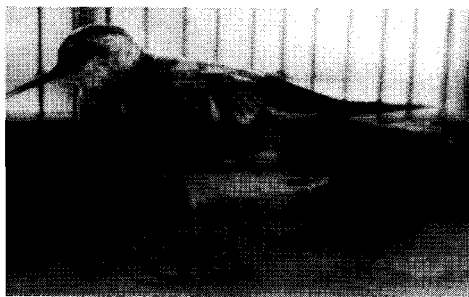
●昭和55年2月4日・1羽・実相寺の林・佐藤村夫

●本州中部以北でのみ繁殖する日本列島固有種である。県内の暖地で越冬中のものと思われる。隠者のように動作が敏しょうで、すぐやぶなどに姿をかくすので観察しにくい。黄緑色をおびた灰褐色で特徴のない鳥だが、目のまわりに淡色のリングが見える位である。スズメよりやや小さく、冬に見かけるがさえずりをしない時季であり、数も少ないため観察の機会は少ない。

⑨ アカエリヒレアシシギ

●昭和51年8月9日・2羽・浜脇海岸・安部 来

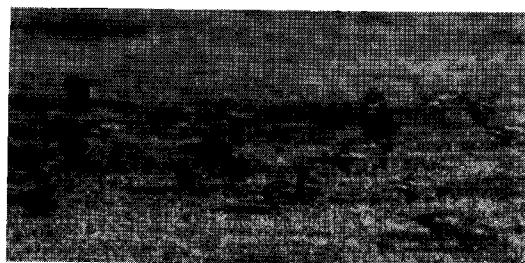
●スズメより少し大きく、よく泳ぎまわり、人を恐れな。夏羽は黒い頭と白いのどに赤褐色のえりがよく目立つ。その名前は「赤いえりをもち、足にひれがある」の意味であろう。卵を産むこと以外、巣づくり・抱卵・ひなを育てることはすべて雄がするという変った習性の鳥である。北半球北部で繁殖し、南方に渡るが、その途中でごくまれに海岸で見かけることがある。



アカエリヒレアシシギ S51. 8. 11.

⑩ ハギマシコ

- 昭和53年2月2日・150羽・実相寺 } 佐藤村夫
昭和55年3月12日・160羽 } サッカー場
- スズメより一周り大きく、ホオジロ位。全身は黒っぽく見えるが、翼や腹が赤紫色でハギの花のようなので、この名前があるのであろう。特に雄のえりの黄白色がよく目立つので見分けられる。シベリアの東部で繁殖し、越冬のために渡来するが毎年姿を見せるわけではない。大群でサッカー場の枯れた芝生で餌をあさっており、時々波が打ち寄せるように、低く飛びながら移動するのが印象的であった。



ハギマシコ 実相寺サッカー場 S 53. 2. 4.

⑪ メボソムシクイ

- 昭和55年6月4日・1羽・浄水場～乙原・佐川金吾
- 「チョリ・チョリ・チョリ」(ゼニトリ・銭取りと聞く人もある)のさえずりは5月23日にも聞いている。それからしばらく休養をとって飛び立ったのであろう。春の渡りの途中で、はやさえずりはじめていたのである。
- スズメより小さく、ウグイスに似た鳥で、黄色味をおびたウグイス色をし、腹まで黄色味がかった。亜高山帯の針葉樹林で繁殖するが、県内では祖母・傾山系でもあの独特の鳴き声を聞くことができる。

⑫ ハイロチュウヒ

- 昭和56年・12月28日・雄1羽・塚原草原・佐藤村夫
- トビより少し小さく、秋・北方より渡来し、暖地で越冬するタカである。雄は名前のように全身が明るい灰色で白っぽく、翼の先端が黒く目立つので見分けられる。草原やあし原のある海岸・河口で低空を飛び、餌を見つけると地面をするように低く飛びながら捕える。ネズミ中型の鳥・カエル・トカゲ・ヘビ・昆虫など何んでも食べる。

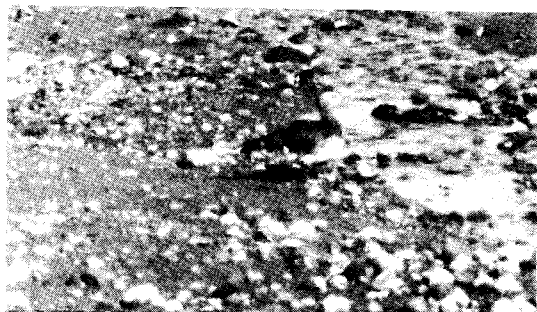
⑬ マミチャジナイ

- 昭和56年11月12日・雄2・雌1羽・浄水地・佐川金吾
- ツグミより少し小さい。眉のある黒っぽいツグミという意味のとおり、白い眉が特徴で胸はオレンジ色であり雌はのども白い。カムチャッカ・東シベリアの繁殖地から東南アジアへの渡りの途中に立寄ったのであろう。昆虫・カタツムリ・ヤスデの小動物のほか、小さい植物の実もたべる。

⑭ オシドリ

- 昭和54年9月7日・雄1羽・春木川河口・佐藤村夫
昭和55年11月3日・17羽・津房川ダム
- 〃 11月16日・雄1羽・〃 } 川瀬泰治
- 〃 11月30日・雄1羽・〃
- 昭和56年10月15日・9羽・〃

●ハトより大きい中型のカモである。雄の冬羽(繁殖期)は絵のように美しい。頭上の緑黒色・顔の淡黄色・くびからはおにかけての赤黄色の美しい羽・胸の紫黒色・横腹の黄褐色など多彩な羽色が目立ち、さらに横腹にあるイチョウ葉型で橙色の飾羽・頭の飾羽・そして赤いくちばし・全く自然美の頂点にある感じである。その雄が雌をよく見守るなど心温まる鳥である。他のカモと違い木の枝にも止りねぐらにする。ひなは10m以上もある樹洞から飛び降りて巣立ち、親について水辺まで行くという。かつては由布川溪谷のシンボルであったが今は渡来しない。津房川ダムも狩猟期には姿をかくし、安全な場所に避難するらしい。



オシドリ 春木川河口 S 54. 9. 7.

おわりに

ほかに⑮コマドリ、⑯アカショウビンなど珍しい野鳥もあるが省略する。大分県野鳥友の会・別府支部の野鳥愛好家によって珍しい鳥が確認されてきた。今後なお増加するであろう。野鳥は行動圏が広いし何時どこで会おうか分からない。特に渡りの時季などは注意して観察したいものである。

べっぷの文化財

— 第13号 —

発行所 別府市教育委員会
別府市文化財調査員会

印刷所 (有) 幸豊堂印刷